

味があります。まずは事務局から基本構想（素案）を説明してください。また、後程オブザーバーとして参加されている国土交通省の脇坂対策官から北京の花博について案がまとまっているようなのでご説明頂ければと思います。

【事務局】

≪資料3, 4：旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会基本構想（素案）及び概要版の説明≫

≪資料5：土地利用検討状況の報告≫

【涌井委員長】

- ・素案について、本当ならば6項目あり項目別に議論すべきではありますが、時間が限られておりますので委員の皆様にご包括的にそれぞれのご評価を頂戴したいと思っております。資料5の土地利用検討状況については、前回ご指摘した博覧会の空間的な構想、具体的なフィジカルプランを作るにあたって、市の土地利用構想が定まっていない段階では難しいのではとご指摘をさせて頂きました。踏まえて現状の中で市が精一杯の状況を説明したとご理解いただきたいと思います。
- ・基本理念が長すぎると思います。これについては「基本理念へのプロローグ」としてP8下部の余白を活用して、基本理念を凝縮したものを示すとスマートではないかとの印象を持ちました。

【福岡委員】

- ・P3について、横浜市には緑や食べ物をつくる活動を日常生活の中に取り込み、楽しんで暮らす人が大勢います。また、30の大学とのパートナーシップと市民によるみどりアップと書いてありますが、園芸博を開催していく上で、実際にどれだけベースとなる社会関係資本力、すなわち「市民の力」があるのかをアピールするべきではないかと思っております。こうした市民の活動や積み重ねを、博覧会を契機にどれだけ高めるのかという目標になるかと思っております。最近の海外の行政計画では、マスタープランは無いが、ビジョンプランだけがあり簡潔に示されています。横浜市が緑を媒介とした豊かな質の高い市民生活を実現していくために、市民とのパートナーシップをどの様に引き上げていくのか具体的に書くといいと思いました。
- ・先日世界ランドスケープ会議のため、カナダに行ってきましたが、博覧会や会議は、ヨーロッパと日本の開催地の招致が取り合いになっています。しかし近年では、アジア諸国も招致活動に力を入れてきている状況です。上瀬谷がアジアや世界の中で何が際立っているのか、引いた視点からオリジナリティを考えることも重要です。
- ・P7について、博覧会を開催することで健康及び社会福祉の向上、環境の増進並びに経済の強化を目的にした植物の活用について書かれています。また、博覧会を開催することで福祉については述べられていますが、健康産業や緑を媒介にした新しい健康のイメージという視点も盛り込んだほうが良いと思っております。神奈川県では、スマートウェルネスの集積地が何拠点か示されていますが、最近では健康についても産業としても注目されています。先端的な医療や福祉の視点だけでなく、人間における健康と緑の関係、すべての人にとってのウェルネスという視点も含めて書いて頂くと良いと思っております。

【池田委員】

- ・旧上瀬谷通信施設は全体で242haの土地があり、その中の博覧会の開催用地として80～100haを想定しているということについて、開催後の跡地は都市公園として整備されるという事は対象地についての多様な考えも生まれるため、それらとの整合性を図る必要があるでしょう。その中で地権者を中心としたまちづくり協議会との調整をどのようにしていくかが重要になるでしょう。せっかく広大で緑豊かな土地が残っている訳ですからこれらが無駄にはいけないと思います。そのためにも地権者の協力が必要不可欠になるので、全体的に価値が上がるなどのメリットを示すことも必要ではないでしょうか。

【和田委員】

- ・資料5について、横浜市が今まで勉強会などを開催して地権者から土地利用について具体的な意見が示されてきたのは良いことだと思います。
- ・P13に事業コンセプトがありますが、体感・共感・実感とよい響きですが、この三つを体で感じて次の行動に移していき、さらに次にどうしていくのかをコンセプトとして示すことまでが必要になると思います。
- ・P33について、国際社会への効果の中で先進国の技術が途上国に行くだけでなく、せっかく生物多様性なども掲げているので、途上国の生活している様や知恵を我々も学ぶ姿勢が大切で、双方向で知恵を分かち合うという考え方が欲しいです。

【若松委員】

- ・入場者1500万人という目標はマーケティング的には問題ないですが、都心近郊型のイベントで注意しないといけないのが、繁閑差の問題です。利便性が良い都市近郊型のイベントは、入場者が土日に集中し易いので、いかに分散させるかもう少し時間的な工夫も必要ではないでしょうか。
- ・時間的な使い方を盛り込んだほうが良いと思います。特に都心近郊部は夜の使い方も大切です。最初から昼の姿と夜の姿を持っている博覧会であっても良いのではないのでしょうか。宿泊施設についても用意されるので、滞在型と夜、昼間という三つの時間的な流れを持つと新しい形ができてくると思います。
- ・愛・地球博の際は市民力を大きいエンジンにしていこうとしましたが、今回の上瀬谷でも非常に大きな力になると思います。観光まで影響力を与えていくのであれば市民の力を盛り上げなければならないでしょう。人材育成も含めて博覧会中にやらなくてはならないことは、沢山あると思います。

【福岡委員】

- ・P21に会場計画・機能構成について、ダイアグラムが提示されていますが、図版が入ると市民にわかり易いです。最終案を取りまとめる上で、基本理念についてはダイアグラムで整理することや、視覚的な情報を通じて市民とのコミュニケーションが高まるようなまとめ方をしてほしいと思います。
- ・P20の中でIoTやAIを活用したモニタリングを行い、情報活用を図り会場運営に反映するとあります。今まで公園や屋外の公共空間では、あまりプログラムやマネジメントの中でどのような利用者の満足度があるか、どの様に利用しているのかを把握する技術があまりあ

りませんでした。今回の博覧会の中で、カメラやセンサーなどを活用して、開催期間中に会場の設えがハードも含めて毎日少しずつ変化することが感じられることが大切でしょう。国際園芸博の開催期間中には、自然の季節による変化もありますが、加えて市民や組織の方々もボランティアやプレイスメイキング（場所づくり）という形で、毎日の変化を耕すように創出することに関わることができるかもしれません。そこで博覧会に行って、与えられたプログラムを体験し、1回行って消費して終わりではなく、リピーターも増やす為のつながりや輪を広げていく仕組みが出来るのではないかと考えました。

- ・先ほど時間的な使い方のお話がありましたが、夜や昼の使い方あるいは時間の伸び縮みのような視点も重要です。時間の刻まれている現代の生活の中で、緑や農に関わることで感じることでできる時間や体験は、私たちの生活にとっても重要な役割を与えたいと思います。来場者は会場に行った際に博覧会だけでなく、周辺の地域で具体的にどんな都市農業が展開されているか、地域固有の食べ物や面白い場所や人などの地域の資源を見てみたいのではないかと思います。滞在期間を伸ばすためにも博覧会のビジョンに資するような農業のモデルや、地域資源を活かしたグリーンインフラのモデルなどが会場計画と連動した仕組みとしてあるとよいでしょう。

【須磨委員】

- ・基本構想文は全体的に長いと感じています。招致は魅力をアピールするような文章でなくてはならないと考えています。今回の資料は全体が網羅的に書かれており、知的な文章になっていますがハートに訴えるような文章にはなっていないです。これから市民意見を募集していくのであれば、読む気にならない可能性があると思います。市民と一緒にやってもらうようなアピール文を付け、詳細については中身を確認してもらうような二段構えの構成にすれば、市民が読みやすくなるのではないのでしょうか。
- ・メディアでは長いコンセプト文を書くと頭の中で整理ができていないと言われます。新聞で言う3行見出しのようなアピール文を前文に載せて、市民にわかり易く、興味の持てる内容にすることが重要と考えます。

【涌井委員長】

- ・横浜は市民力を伝統的にエンジンにしてきたことは、他の自治体に先駆けていると思います。このような視点を市民意見募集にも心がけていただきたいと思います。

【隈委員】

- ・アピールのことで会場計画についてゾーニング型ではなく、クラスター型であるという事は言葉では新しい感じがしますが、P21で示されている図版では理解しにくいと思います。これをわかり易いものにするにはもっと具体的に議論するべきでしょう。人間のコントロールの仕方を考えないと従来の型を超えることはできず、横浜らしさが出てこないでしょう。
- ・時間の使い方については、これから日本のまちは夜が寂しくなってしまうので、夜を楽しく過ごすイベントの扱いをどう考えるかが重要になるでしょう。また、これらは宿泊とも関わってきます。グランピングなど具体的なスタイルを提示しているのは面白いですが、写真で示しているだけでは、博覧会とどのような関係があるのかが分かりにくいです。

【涌井委員長】

- ・ゾーニングプランからレイヤーへの簡単な説明をお願いします。

【事務局】

- ・大阪花博の会場構成はゾーニングで機能を分断してしまって、エリア間の交流はあまり考慮されていませんでした。愛知万博では、ゾーン間の繋がりをグローバルループで繋ぐ試みがされましたが、実際には実現できませんでした。パビリオンの外での待ち時間も長く、建物の内外での混在、融合の形は進んでいなかったです。このようなご指摘を受け、今回は外で待っていても楽しい、建物の中でも楽しい、かつ行催事もそこに重なり、これらをオーバーラッピングさせる博覧会にしたいと考えています。しかしこの方法が適切か、また本当に1500万人を捌ききれぬのかについて、さらに検討が必要だと思えます。
- ・時間の使い方についても、時間を区切ってそれぞれに特色を持たせてリピーターを呼び込んで行くなど、たくさんの人に来園していただくための工夫について、さらに検討していく必要があります。

【涌井委員長】

- ・博覧会用語での「展示」は、広範囲な意味で使われていて市民には理解しにくいと思えます。隈委員のご指摘に対し、基盤としての風土性がある上瀬谷の原風景の上にどんな会場が作られるのか、どんな空間的なコンセプトで重なってくるのか、そこにどんな行催事が行われるのかのマトリックスが示されていることが必要です。なおかつ空間概念と時間の概念や場合によると開催初期から中盤、終わりに至るまでどのように変化していくのかをダイアグラムで整理できると、集中日にはどう対応すればよいかと言う戦略が見えてくるという提案だったかと思えます。

【隈委員】

- ・季節の問題も同じことです。日本ほど四季が豊かな国は無いので、他の国とも優位性が持てるわけです。季節と会場計画をうまく連動した形で、混んでいる日と混んでいない日、あるいは混んでいる日をコントロールできるのであれば、人しか見えなかったということはどう避けるかという検討が重要になるでしょう。

【坂田委員】

- ・素案の表現の仕方については皆さんと同感でわかりにくいものになっていると思えます。市民の方に理解してもらえようになると、読みやすいような工夫が必要になるかと思えます。文章になるのは仕方ないですが、ポイントやメリハリ、キーワードを付けるなどの工夫が必要になるのではないのでしょうか。

【須磨委員】

- ・上瀬谷だけの閉鎖型の博覧会にならないために、日本の生物多様性は世界から評価されていることを考慮すると、博覧会で展示されている原風景が日本各地で見られるという案内も展示していくべきだと思います。他の地域に行ってもらえるように他都市と連携して参加したくなるような仕組みづくりもこれからは必要になるのではないのでしょうか。

【岸井委員】

- ・今回の基本構想は非常にわかりにくい文章になっていると思えます。グリーンインフラを

挙げていますが、この世界で新しい概念として受け止められるかということについては専門家の皆さんとの議論になりますが、従来からあるようなものと思われるのであればつまらないのではないのでしょうか。新しいグリーンインフラを作る・考えると言っても良いと思います。

- ・また、メインテーマでもある「Scenery of Happiness」がグリーンインフラとどのように繋がっているのかが描かれていない点もわかりにくさの原因ではないのでしょうか。6つの事業コンテンツとグリーンインフラの関係性がもう少し見えるとわかりやすくなると思います。
- ・会場の跡地がどうなるのかというレガシーももう少し示せると良いと思います。今のままでは将来像を「Garden City Yokohama」としてありますが、世界的に見ると今さらのように思われてしまいます。上瀬谷から次の概念が新たに生まれるといったイメージを打ち出せると良いと思います。

【水谷委員】

- ・文章の量が多く読み通すのがつらいと感じました。要点を工夫して整理できると良いと思います。P21の図版についても一般の市民がわかりやすいようにできると良いです。具体的な案は示せないかと思いますが、どんな空間になるのかを示せる図やキーワードだとわかりやすいのではないのでしょうか。
- ・P27の宿泊計画については、観光の観点から見てもインバウンドだけでなく、学習旅行や生物多様性を学ぶ場にするなど、博覧会後もどのように活用できるのかを示せると良いかと思っています。

【涌井委員長】

- ・一番肝心なのは市民や市会から意見を頂く際に、テーマの表現の仕方がこれで良いかということと、開催意義と効果についてはこれでよいかが挙げられます。博覧会を開催することで日本や世界に何をもたらすのか、何が得られるのか、開催によって社会にどんな影響を与えられるのかという試みを波及できるのかがあります。そのような事を前提とした場合に新たに検討すべきことがあれば意見を頂きたいと思います。
- ・横浜市の緑行政は先駆的に市民力をエンジンにしてきたことをもっと強調すべきではないのでしょうか。シェアの概念についてはこれからの社会は分かち合いの時代になるでしょう。賢い分かち合いが重要でそれらがコミュニティという顔の見える互助と同じ共通認識をもった助け合いという共助に繋がっていきます。そのような話が緑や花を使えば理屈を超えて共感できるということをもう少し前面に出しても良いと思います。
- ・先ほど博覧会が日本の経済が縮退する時代の大きなインパクトになりうるといった説明がありましたが、関連公共事業を除いて600億程度の投資では日本経済を牽引していく事にはなりません。むしろトリガーの効果になることや、質に対して大きな効果があるという表現の方がよいのではないのでしょうか。
- ・簡単で構いませんので、北京の園芸博覧会について現在どのような状況になっているか脇坂対策官からお話し頂けないのでしょうか。

【脇坂対策官】

- ・2019年4月から10月まで北京で開催される予定になっています。まだ予算が決まっていないので政府として正式に出展する意思決定はしておりませんが、9月に農水省の植木リーダーと和田委員と日本の出展予定区画の確定をしてくれました。
- ・テーマが「Live Green, Live Better」と非常にシンプルなものになっています。その中に園芸のみならず、環境の保全や生活の向上などを込めたテーマになっています。面積が500haと大規模ですが目標参加者が1600万人と控えめな設定になっています。
- ・その中でなぜ中国が園芸博を開催するのが極めて明白であったことが印象的でした。2019年は新中国の建国70周年にあたる年になっています。国慶節が10月までなのでその時期まで様々な博覧会イベントを行うことになります。また、開催場所が北京の北部に位置する延慶区という万里の長城の近くで行われます。この場所で行う理由として近くにある水源地の保全をしつつ園芸産業や福祉産業を中心とした地域として活性化したいという狙いがあるようで、都市づくりの戦略も極めてクリアなものになっています。今回の検討においても北京の事例は参考になるのではないのでしょうか。

【隈委員】

- ・北京の事例は跡地利用も含めてしっかりしたものになっていると思います。横浜の博覧会の跡地が、ごく普通に環境を売りにしたマンション群になってしまうとすればもったいないと思います。開発を誘導するものになってしまうと、かえって開催しない方が良いでしょう。
- ・横浜にどのようなものを残せるのかという事を考えると、その場所で知的な活動が続いていくのは重要だと思います。ミラノ博覧会の跡地ではミラノ大学が中心になって研究の場として根付いています。将来もこの場所で知的な活動が続いているのは非常に大切です。そのような意味では緑と知的な研究については日本ではまだまだ遅れているので、そういった場所ができると思いいます。

【涌井委員長】

- ・毎年森ビルでフューチャーシティーという国際会議を行っています。この会議の中で先日初めてバイオテクノロジーと都市のセッションが設けられました。世界の食料や栄養、医薬品など様々な問題を扱っています。都市生活と今までの狭隘な農の概念ではなく、広い意味での生活社会とどう共生していくかという視点が都市計画には重要であると指摘されていました。隈委員の意見はこのような方向性も今回の検討で示唆されていますが、もう少し未来的に強調するやり方が良いと仰っているのだらうと理解しました。

【福岡委員】

- ・グリーンインフラが今回の会場構成の中で重要な視点になっていますが、いくつか気になる点があります。1つ目は地域資源や自然資源など上瀬谷に存在する様々な環境的な資源を理解してマネジメントする視点があります。
- ・2つ目に会場を作っていく際にシェアの考えがあります。先ほど委員長からお話があったように、これからは人の話だけではなく、例えば道路の使い方があります。道路には非常時に水をいやす機能を持っていたり、日常的に人が公園のように使うことを実際にコペン

ハーゲン市が気候変動適応策として取り組んでいます。コペンハーゲンの成熟した中心市街地では、公園緑地や空地など水災害をいなく空間が取れないために道路空間に着目し、水をしみこませる機能と緑の機能、人が集う機能、自転車・自動車道を全て共用するという取り組みを行っています。会場を作っていく上で、このような多機能、共有型の空間設計も積極的に考えていくべきです。また、都市農業も今までと違う形でこれから進めていかななくてはいけないと感じています。農地は食べ物の生産の場所という機能に加えて、都市の中の緑地や環境としての便益をたくさん持っています。整備計画に以上のようなグリーンインフラの考え方を導入し、結果的にインフラの整備投資が減るという事も言えるのではないのでしょうか。

- ・3つ目にグリーンインフラを育てるということです。市民は緑を見たり触ったりすることで幸せになるのではなく、緑に関わり続けることで喜びを感じたり、ストレスを緩和しています。緑を作ることをコンテンツにするのではなく、関わることや育てることを続けることが大事になると思います。このようなものを博覧会のレガシーとして残す事を波及効果で示せるとわかりやすくなるのではないのでしょうか。グリーンインフラという概念を理念的な部分と適用の部分で少し切り分けて考えた方が良いのではないのでしょうか。

【涌井委員長】

- ・1500万人は現状の土地利用や地権者との話し合いや輸送機関の整備などの見直しから見ると、非常に苦しい状況にあると思います。おそらく2,000万人~2,500万は来てしまうと思います。そのようなことから今までの博覧会とは違う新たなアイデアが必要になると思います。例えば会場に住めるようにしたり、あるいは全く新しい交通機関を考えてみたり、あるいは混雑を解消するために24時間対応にしてみたりして、この会場を今までにない博覧会の運営の魅力を付けていくことが重要です。その点で現在事務局が悩んでいることが新たな博覧会を開催するブレイクスルーになるかも知れません。

【岸井委員】

- ・グリーンインフラはエコインフラではないと思います。この発想を変えていかないと先が無いと感じています。道路でもグリーンインフラにすることはできるし、エコだけの問題ではありません。皆で共有したり、参加出来たりすることにグリーンのコンセプトが大きく関わってきていて、それがまちをより豊かにしていくし、最近のIoTを含めて新しい都市に必要なコンセプトを打ち出していくものではないかと思います。

【涌井委員長】

- ・シビックデザインという考えがありますが、私は池尻大橋にあるジャンクションに天蓋を付けて公園を整備したことがあります。つまり、これからの社会資本はグレーもグリーンもないと考えています。市民力でマネジメントしていく考えで、都市をマネジメントしていくことについて市民がどう関わっていくかがあります。その関わっていく入り口として花や緑などの理屈を超えた共感性があるものが据わっており、それらがタウンマネジメントをしていく動機づけになっており、同時に社会資本が複合化することによって縦割りではない広域的な機能を果していくという社会を目指していかないとはいけません。

【岸井委員】

- ・今の話は必ずしも先進国だけの問題ではなく、開発途上の国においてもいかに食料を生産し、ちゃんと行き渡るようにするかという事に、みんなが参画して次の新しいブレイクスルーを見つけていかななくてはいけません。その種となるようなものを上瀬谷から発信していけると世界にとっても良いことだと思います。

【隈委員】

- ・抽象的なレイヤーについてもそのような実例がいくつか出てくるとレイヤーの意味がもっと具体的になると思います。これらがもう少し展示についても絵として示せると全体のイメージが変わってくるでしょう。

【若松委員】

- ・愛・地球博の時は丘陵地でしたのでロープウェイを設置しました。今回は平坦地なので視点の移動があまりにも少ない会場になってしまうので、ロープウェイは逆効果でしょう。様々な工夫をしていかないと魅力的な空間にはならないでしょう。繁忙期は平日の5倍程度の人がかかることも予想されるので、景観を見せる場合ではなくなるでしょう。上手く来場者を分散させる工夫を検討の段階で持っていないと今回試したい「シェア」ができないと思います。
- ・例えばお台場は都市部にありますが、観光地化してしまっていてお店の売り上げがなかなか上がりません。きちんとした戦略を立てないと上瀬谷も同じ現象になる恐れがあります。

【涌井委員長】

- ・池泉回遊式庭園の見せ方は串団子状になっています。視点場の高さを変えたり、歩きやすさと歩きにくさを組み合わせて園路をつくり、見せ場と見せ場を繋いでおり歩いて飽きさせない空間づくりになっています。今回の会場計画についても視点場を変えてみたり、分節的な空間が繋がっていくような日本庭園が持っている基本的な設計方式をストーリーで繋いでいくと面白いかもしれません。

【隈委員】

- ・ミラノ博覧会の日本の展示は軸線上レイアウトされていて、ヨーロッパの幾何学的規定でどこまで表現できるかに挑戦したものでした。池泉回遊式のレイアウトのアイデアは今までなかったのではないのでしょうか。全体を庭園として考えていると人間の処理の仕方が考えられていて面白いと思います。

【涌井委員長】

- ・雛と雅の考え方が日本庭園の特色です。雅は風雅なもので、雛は農の風景を表しています。桂離宮や修学院離宮にしても農風景という普段はなんとなく目にしているものを上手な見せ方をすることによって感動的な風景にするという技術があります。そのような発想を演出の中に取り入れていくのも面白いです。

【福岡委員】

- ・ルーブル美術館では、展示を見ていく時に混雑する場所がありますが、美術館の中でブルートウスの電波を飛ばして館内の人の動きを把握して混雑を解消させる実験をしているそうです。基盤として日本の池泉回遊式庭園のようなものと、自分が能動的に動くこと

で風景が展開していくということをもう少しテクノロジーを使って、会場に入ってから帰るまでの時間や自分の動きを自分でコントロールできるのは面白いのではないのでしょうか。現在の技術を使って情報を与えながら人の動きをデザインできると面白いのではないのでしょうか。

【涌井委員長】

- ・坂田委員に質問があります。前述したフューチャーシティのシンポジウムの話ですが、これからはバイオテクノロジーが不可欠になってくるそうです。NYの地下鉄のつり革に付着している遺伝子情報を調べると様々な場所から来ていることがわかりました。また、先日の洪水があった時に地下鉄に流れた水を分析してみると南氷洋の生物の遺伝形質が残っていたそうです。品種改良などバイオテクノロジーが世界を変えていくことは可能性としてありますか。

【坂田委員】

- ・一口にバイオテクノロジーといっても様々な分野がありますが、今一番話題になっているのがGMOと呼ばれる遺伝子組み換えの分野です。今この分野が滞っているとされていてパブリックアクセスがなかなか取れない状況です。そのような中で今出てきているのがNPBT(New Plant Breeding Techniques:新植物育種技術)というもので、GMOだけど厳密にはGMOではないものが出てきていますが、現在世界ではそれを受け入れるかという議論について結論が出ていません。2026になるとGMOの考え方や新技術が受け入れられる時代が来るかもしれません。そういったGMO関係のアピールを今回の博覧会で行う意義もあるかもしれません。

【涌井委員長】

- ・COP10中に開催されたMOP5の時に名古屋議定書ができましたが、日本は世界で最も真剣に議論して10年かけてようやく今年成立しました。それだけに世界の模範になる可能性があります。この延長上に生物多様性の未来を捉えるという側面もあるのかもしれませんし、実は日本は現在の麦に至るまでの原種の研究など世界に貢献しています。もしかすると日本の国力に貢献できれば、博覧会のテーマやランドスケープの中に包含されるものとして見つかってくるかもしれません。

【植木リーダー】

- ・市から国にあげる基本構想なので網羅的な記載となるのは理解できますが、見せ方については場面ごとに工夫してほしいです。多くの一般の方に理解して欲しい場面であれば、それらの方に何をPRして、博覧会に来たときに何をもち帰ってもらいたいのかを想定しながら検討したらどうでしょうか。

【岸井委員】

- ・メインテーマをどのように実現していくのか、そこが世界に発信していく部分になると思います。グリーンというキーワードは外さずに従来からグリーンと思われていたもの以外の新しいグリーンを創出したり、これらが私たちの生活を豊かにしていくという事が、コンテンツとして出てくるとわかりやすいと思います。

【涌井委員長】

- ・ 今回の検討を要約してみると、市が国に招致を依頼する文章と、市民への呼びかけのコンテンツは同じ表現の仕方をしなくてもよいということです。市民目線になった時にわかりやすい訴え方が出来るようにするべきとの意見がありました。そのなかで重要なのはグリーンインフラの拡張概念をしっかりと再定義してみる必要があるということと、会場計画の表現についても現段階では基本構想ですが、概念についてはもう一度しっかりと議論する必要があります。またアジアが持っている特性をどう表現していくのかということや、あるいは北京とどう差別化していくのかも考えていかななくてはなりません。空間だけでなく、時間の区切りの中でどのように来場者を期待して、来場者に期待はずれと思われぬようなアクティビティの仕分けができるのかについてしっかりと検討するべきとの意見がありました。

3 閉会

【事務局】

- ・ 次回委員会の日程につきましては、2月頃を予定しています。詳細につきましては今後調整させていただきます。